

たてはく

「立山曼荼羅」の特別公開を開催中！

冬の立山曼荼羅特別公開展「立山曼荼羅と岩峯寺の湯立釜」

令和元年12月10日（火）～令和2年2月24日（月・祝）

立山博物館では、収蔵する「立山曼荼羅」を資料保存と定期的な公開の観点から、一年間に4度の展示替えをおこなっています。

今冬の立山曼荼羅特別公開展では、立山曼荼羅に描かれている「湯立釜」に焦点をあてました。「立山曼荼羅」には、かつて岩峯寺集落に位置した「立山寺」（現 雄山神社前立社壇）に大きな釜が描かれている作品がいくつかあります。この釜は毎年4月8日に同所で行われていたとされる湯立神事で用いられたものといわれ、加賀藩主から寄贈されたものが、今も雄山神社の境内に現存しています。

展示している立山曼荼羅は、専称寺本と立山博物館B本（県指定）で、特に専称寺本は、今年度、富山県へ寄贈を受けた立山曼荼羅で、唯一の江戸時代の絵解きの種本とされる『立山手引草』（玄清筆、嘉永7年、岩峯寺延命院蔵）の内容と構図が似る作品として大変魅力的で興味深い曼荼羅です。

これらの立山曼荼羅に描かれる「湯立釜」に関する古文書が岩峯寺多賀宮（旧多賀坊）に伝わっています。この度の展示では、こうした古文書もお借りし、あわせて公開しています。

そして、「湯立釜」は岩峯寺だけではなく、芦峯寺



の雄山神社にも伝わっており、参考資料として実物を展示しています。ぜひ会期中のご観覧をお待ちしております。（加藤基樹）

場 所 富山県 [立山博物館] 展示館
常設展示室2階（一部）

料 金 常設展示観覧料300円（一般）

休 館 日 月曜日（祝日を除く）、

1月14日（火）、2月12日（水）

目次

「立山曼荼羅」の特別公開を開催中！

冬の立山曼荼羅特別公開展「立山曼荼羅と岩峯寺の湯立釜」	1
文化財の継承	2
令和元年度 後期特別企画展「かがやく天産物 時代を越える立山ブランドを求めて」を終えて	2
令和元年度 立山博物館友の会バスツアー「南砺・土徳の里を訪ねて」	2
山岳集古未来館資料紹介	
堀田彌一資料から－ナンダ・コートの装備⑦ 防風帽（オーヴァーフード）	3
【ボランティア活動報告】教養講座で大岩山日石寺（上市町）を「ぶら散歩」	3
中堅教諭等資質向上研修	4
博学連携 今年も新川みどり野高校で出前展示開催！！	4
教算坊呈茶会「もみじ呈茶会」を開催しました	4
14歳の挑戦！	4
編集後記	4





館長
城 岡 朋 洋

文化財の継承

再び回復することができないかけがえのない国民共有の財産である。なかには人類共有、地域共有の性質を帯びるものもある。当館にも国指定の重要文化財や重要有形民俗文化財をはじめ、数々の歴史的資料が所蔵・管理されている。いずれも先人たちが紡ぎ出してきた地域の記録であり、現在および未来に生きる人びとの生きるよすがとなっている。文化財が失われることは、過去から未来への人間のあり様にも影響を与える重大事であるがゆえに悲しみが大きくなるのである。

平成から令和の時代に転換し、立山博物館は来年30周年を迎える。悲しい出来事が相次いだこの機会に、あらためて博物館における文化財保護の役割、特に地域の文化財の後世への継承のあり方について議論を深めていきたいと考えている。

今年も立山博物館をよろしく願います。

昨年4月、フランスのパリ中心部にある世界遺産ノートルダム大聖堂で大規模な火災が起き、同年10月には沖縄県の首里城が焼失した。燃えさかる首里城を見ながら涙する県民の姿は痛ましく、記憶にまだ新しい。首里城では復元建物が焼失するだけではなく琉球王国の時代のものを含め多くの貴重な文化財が一瞬のうちに失われた。

文化財は、火災等によりいったん滅失毀損すれば、

令和元年度後期特別企画展

「かがやく天産物 -時代を越える立山ブランドを求めて-」を終えて



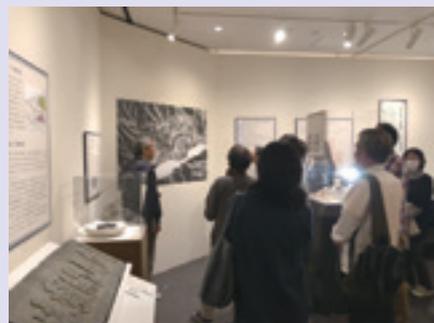
今回の企画展では、富山ではあまり知られていなかった事実を発掘してご紹介しました。日本で鉱物学が研究され始めた明治最初期の鉱物標本の展示。明治

新政府が国内の鉱物資源の調査に力を入れていたこと。日本を西洋に紹介するために力を入れた明治6年のウィーン万国博覧会で越中・立山で採集した鉱物標本が展示されたこと。そして、昭和のわずか10年間だけ芦峯寺にあった「立山炭鉱」の歴史を紹介して地元の皆様喜んでいただけたのも大変ありがたいことでした。

会期中、閉館後に展示ケースを拭く時、平面ケース

の亚克力の上に直径1cm程の丸い跡を何度も見かけました。どうもケースに顔を近づけられた方の鼻先が付いた跡のようでした。顔を寄せてじっくり覗き込んでくださった方が多かったのかと思うと、その度に不思議なうれしさが湧いてきました。

ご観覧いただきました皆様、ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。(吉野俊哉)



令和元年度
立山博物館友の会バスツアー

「南砺・土徳の里を訪ねて」(令和元年11月27日)

たてはく友の会では、立山博物館ボランティアの方々と一緒に、毎年バスツアーを開催しています。

世界遺産「五箇山」の岩瀬家住宅・行徳寺に始まり、富山県初の『白山曼荼羅』が見つかった上梨白山宮を参拝、相倉集落を散策、聖徳太子信仰と木彫りの里に位置する井波瑞泉寺を拝観(山門も特別拝観)、そして本願寺蓮如ゆかりの城端善徳寺を拝観しました。

「近くて遠い」県内屈指の観光地への旅にもまた、あらたな発見がありました。(加藤基樹)





山岳集古未来館 資料紹介

堀田彌一資料から—ナンダ・コートの装備⑦ 防風帽 (オーヴァーフード)

立教大學ヒマラヤ踏査隊 (1936年；ナンダ・コート登攀隊)、堀田彌一隊長の装備。今回は防風帽を紹介する。

防風帽とは、文字通り山上の烈風から頭部を守るため、毛編目出帽の上に重ねて装着し、目出帽の編目を通して進入する強風を手前で遮断する被り物で、時に「オーヴァーフード」と呼称されるが、その使用環境下では、防風機能は防寒機能とほとんど同義となる。

堀田の防風帽は目出帽と同梱され、包みには「目出帽」・「目出帽#2 (オーヴァーフード)」併記の紙片と「目出帽」・「防風帽」併記の紙片が貼られる。堀田の装備が初めて一般公開された千葉県立中央博物館の特別展『ヒマラヤ人・自然・文化—』(2001年)の解説書は「防寒帽子 (木綿製)」と記す。その機能と装着形態とに着目し、ここでは資料名称を「防風帽 (オーヴァーフード)」(以下、防風帽)とする。

堀田の防風帽は、冠 (crown；帽体) 部と鋲 (しころ；垂れ；neck flap；neck guard) 部が一体化した軽く簡素な構造を持つ一種の頭巾で、裾広の釣鐘型形状をなす。接ぎは、後述生地Aでは冠頂部を除く帽体+鋲部が前左右・後左右の四枚接ぎ。冠頂部も四枚接ぎか (見かけ上は八枚)。後述生地Bは劣化・損傷が著しく、未確認である。

正面中央上部には横長の目出用切欠 (上辺中央は下に緩やかな凸、下辺中央開放、左右縁は丸味) があり、その縁辺はそのまま左右の鋲前縁上端角を経て左右それぞれの鋲前縁端 (直線状) へと移行する。鋲前縁を重ねると切欠下縁は閉じて目出窓を成す。左右の鋲前縁上端角には白木綿綾織平紐の括紐が付き、目出切欠右端縁から約1.5~2cm横には膝穴 (径約5mm) が後付けされる。目出切欠の左右縁から下辺部 (即ち鋲左右前部最上部) 附近に散在する虫喰状小穴は、鋲前部の重ね留めに用いた安全ピン等の使用痕跡か。目出切欠左端下縁には縁靡りを破断した穴の痕跡も残る。後述する生地A側の帽の背面 (目出切欠下部の高さ位置) には、生地に縫寄せて真一文字に平ゴム紐が縫い付けられ、装着時の適合感向上に貢献している。商標等はない。

素材生地は帽全体に同じ二種二層の構造を持つ。一層は暗褐色のニット生地 (稍薄手のウール・ジャージー様) [A]、もう一層は極薄手の絹織物様生地に膠様または樹脂様の糊材を引いて織目を潰した素材 (生地) [B] で、経年劣化が著しい。保存現状ではAが表、Bが裏となる。

堀田の当該装備全貌を初公開した写真 (渡辺正和撮影；「山と溪谷」1988年8月号) ではBが表で、記事を執筆した布川欣一に

依れば、当該写真の撮影には堀田が立ち会い、最終確認も行ったという。一方、2001年の前掲解説書にはAが表の写真が載る。あるいはリヴァーシブルかと思うが、機能が「防風」であれば、やはり風を遮るBを表とするのが妥当だろう。保存に際して傷んだBを内側にした可能性も考慮すべきか。今のところ確証できぬ謎である。

山縣ノオトの構想に防風帽はないが「悪天候のときの爲、皮の半マスク、鼻の部分は毛皮にメガネをつけたもの、口の部分だけ穴のあいたもの」との一文がある。構造が複雑で重く使い勝手が悪そうな「半マスク」が実現したとは思えぬが、防風性能が高く「悪天候」時に眼から下の顔面と頸部を護る装具は必ず要る。その主たる機能を継承したのが、この「防風帽」だったのではないか。
(吉井亮一)



堀田彌一のオーヴァーフード

全体観 (写真上左：正面観、写真上右：正面観 (鋲左右前部を開いたところ)、写真下右：側面観、写真下左：背面観)。全体寸法：高さ45.0 (43.5) cm (背面正中線 (側面中央)；ともに畳んだ (つぶした) 状態)、横幅27.5 (32.5) cm (目出窓上辺の位置 (同下辺の位置))、鋲 (しころ；垂れ) 下辺 (縁) 長108cm。木綿綾織平紐：幅1.4cm (左右とも)、全長68.0cm・70cm (左・右)。平ゴム紐：幅1cm・全長30cm (放置収縮状態)。当該防風帽の素材劣化が進んでいて、表裏を反転したり細部を展張しての計測はできないため、以上の測値は現状のまま計測した参考値 (概寸) である。また左右の表記も現状での帽自体の左右を意味する (本文とも)。

ボランティア
活動報告

教養講座で大岩山日石寺 (上市町) を「ぶら散歩」

昨年10月の教養講座で訪れた滑川市内に続き、立山への参詣道ということで、10月26日 (土)、今年度第6回目の教養講座で大岩山日石寺を訪れました。講師としてご案内してくださった中田真法先生のご厚意で、今回特別に本尊である摩崖仏 (不動明王像、弥勒羅童子像、制陀迦童子像、阿弥陀如来像、僧形像) を間近に見せていただき、さらに普段立ち入ることのできない場所も案内していただきました。参加したボランティアや友の会会員の皆さんは、真法先生の思い出話なども交えた楽しい語り口で、和やかな雰囲気の中でもしっかりと勉強できたようです。(細木ひとみ)



立山博物館では、ボランティア&友の会会員向けの教養講座を年6回ほど開催しています。ご興味のある方はぜひお問い合わせください。



中堅教諭等資質向上研修

11月12日(火)～14日(木)の3日間、当館では富山県総合教育センター主催の中堅教員の「社会体験研修」を受け入れました。今年度は高岡商業高校野球部監督である吉田真先生が当館学芸員の仕事を学ばれました。最終日は団体のお客様に「立山曼荼羅大仙坊本」の解説をされ、皆さん熱心に耳を傾けておられました。短い期間でしたが、教員としての視野と見識を広めていただけたのではないかと思います。
(高野靖彦)



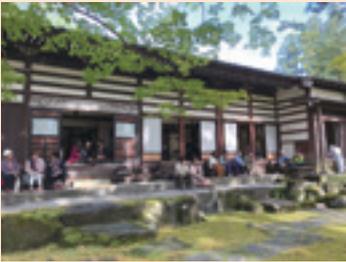
博学連携 今年是新川みどり野高校で出前展示開催!!

県内高等学校にて開催する出前展示、今年是新川みどり野高校の新川キャンパスフェスティバル(11月2日)にお邪魔しました。
立山地獄をテーマに、会場には立山曼荼羅のレプリカをはじめ閻魔王像や浄玻璃鏡、八大地獄パネルなどを展示しました。今回は、当館特製「閻魔帳」がもらえる「3択立山クイズ」や「立山曼荼羅絵解き解説会」、立山に関する講義(45分)を行い、大好評でした。出前展示先は随時募集中です。ぜひ活用ください!
(森山義和)



教算坊呈茶会 「もみじ呈茶会」を開催しました

富山県[立山博物館]教算坊で毎年、春は「青葉呈茶会」、秋は「もみじ呈茶会」を開催しています。11月3日(日)の秋晴れのなか、芦峯寺に残る宿坊「教算坊」の庭園(平成24年「とやまの名勝」選定)に549名のお客様がお越しになりました。
今年は見頃にはやや早い紅葉となりましたが皆様、それぞれに美しい庭園を眺めたり、写真を撮られたりしながら、お茶を楽しまれました。(岩崎証意)



14歳の挑戦!

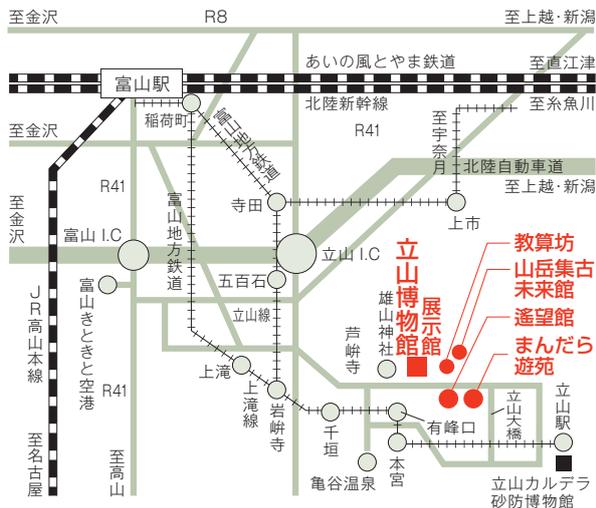
今年も10月1日～4日に「14歳の挑戦」が実施され、地元立山町の雄山中学校2年生の女子2名、男子1名が、立山博物館に来ました。3名の生徒は、お客様の受付案内や宿坊施設の清掃、かもしかの食事の世話など、現場において実際に様々な職場体験をしてもらいました。3名はそれぞれ将来、就きたい職業の夢をもって博物館に来ました。初日には不安な表情も徐々に自信をつけた顔に変わっていきました。少しでも子供たちの夢の実現に役立てたなら幸いです。(岩崎証意)



編集後記

あけましておめでとうございます。今年はいよいよ東京オリンピックが開催されます。それに向けて昨年より電子マネー化やセルフレジの導入などをはじめ、身のまわりの生活が大きく変わりつつあるを実感します。立山博物館は開館30周年を来年に控え、城岡館長のもと、今年も継承と変革を模索する大事な一年になります。本年も何卒よろしくお祈りします。(加藤)

案内図



- 最寄り駅
富山地方鉄道立山線千垣駅
下車徒歩(約2km)
※日曜を除き町営バス運行
「雄神社前」下車すぐ
- 自家用車で
JR富山駅から 約45分
立山駅(千寿ヶ原)から 約10分
富山インターチェンジから 約35分
立山インターチェンジから 約30分

立山博物館のホームページはこちらから。



人間と自然のかかわり方を学ぶ

富山県[立山博物館]

〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1
TEL 076-481-1216 FAX 076-481-1144
<http://www.pref.toyama.jp/branches/3043/home.html>

Facebook あります! [立山博物館](#)